

令和元年  
10月31日

# 病害虫発生予報 11月号

茨城県病害虫防除所  
茨城県植物防疫協会

収穫終了後は被害葉等の残渣を圃場から持ち出し、  
次作の病害虫の発生源を減らしましょう。

## < 目次 >

### I. 今月の予報

#### 【注意すべき病害虫】

促成ピーマン：斑点病	1
秋冬ハクサイ：軟腐病	1
秋冬ハクサイ：べと病	2
冬レタス：斑点細菌病	2
秋冬ネギ：ネギアザミウマ，ネギハモグリバエ	3

#### 【その他の病害虫】

イチゴ，促成ピーマン，促成キュウリ，秋冬ハクサイ，冬レタス，秋冬ネギ	5
------------------------------------	---

#### 【防除所レポート】

ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策	6
ナシ黒星病秋型病斑の発生状況と秋季防除	7
令和元年のブドウ主要病害虫の発生経過と今後の防除対策	8

### II. 今月の気象予報

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの  
「農薬登録情報提供システム」([http://www.acis.famic.go.jp/index\\_kensaku.htm](http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm))で  
確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nour/insuisan/nosose/byobo/>  
フェロモントラップデータ随時更新中

<HP QRコード>



# I. 今月の予報

## 【注意すべき病害虫】

### 促成ピーマン

#### 1. 斑点病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、発病度\*（本年値 0.3，平年値 0.05），発生地点率（本年値 25%，平年値 5%）ともに平年よりやや高い。

※発病度：病斑をもとに算出した数値，最小値は 0 で最大値は 100 となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 多湿条件で発生しやすいため，整枝，換気等によりハウス内の湿度を低く保つ。
- ② 発生が多くなると防除が困難になるため，初期防除を徹底する。
- ③ 罹病部はできるだけ取り除き，ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ④ 薬剤散布は，薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また，薬剤耐性菌の出現を防ぐため，FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑤ 天敵を導入している場合は，影響の小さい薬剤を選択する。

### 秋冬ハクサイ

#### 1. 軟腐病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在，発病株率（本年値 5.1%，平年値 1.8%）は平年より高く，発生地点率（本年値 53%，平年値 25%）は平年よりやや高い。
- ② 気象予報によると，向こう 1 か月の気温は平年よりも高く，降水量は多いと予測され，発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 既に発生が認められる圃場では，被害が拡大しないよう薬剤散布を行う。今後発生するおそれのある圃場では，初発に注意し，発生初期からの防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は，収穫前日数，使用回数等に十分注意し，薬液が葉裏や株元にも，よくかかるよう十分な量で丁寧に行う。
- ③ 風雨が多いと発生が助長されるので，強風を伴う降雨の後は，防除を徹底する。
- ④ 本病の病原菌は傷口から感染するため，管理作業で葉等に傷をつけないようにする。特に，降雨前後の作業時には十分注意する。
- ⑤ 被害株は翌年の伝染源となるため，圃場外に持ち出し適切に処分する。

(秋冬ハクサイ 続き)

## 2. ベと病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在，発病度（本年値 1.0，平年値 0.9），発生地点率（本年値 18%，平年値 15%）ともに平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 降雨が多いと発生が多くなるため，気象条件を考慮しながら防除を行う。
- ② 薬剤散布は収穫前日数，使用回数等に十分注意し，薬液が，葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。

## 冬レタス

### 1. 斑点細菌病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県西地域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在，発病株率（本年値 7.3%，平年値 1.3%）は平年より高く，発生地点率（本年値 27%，平年値 15%）は平年よりやや高い。
- ② 気象予報によると，向こう1か月の気温は平年よりも高く，降水量は多いと予測され，発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 降雨が多いと発生が多くなるため，気象条件を考慮しながら防除を行う。
- ② 多発すると防除が困難となるため初期防除を徹底する。
- ③ 薬剤散布は，収穫前日数，使用回数等に十分注意し，薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。
- ④ 被害葉は翌年の伝染源となるため，圃場外に持ち出し適切に処分する。

## 秋冬ネギ

### 1. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、芯葉の被害株率(本年値 85.0%, 平年値 58.2%)は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 雑草にも寄生するため、圃場周辺の除草を徹底する。  
② 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。  
③ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

### 2. ネギハモグリバエ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

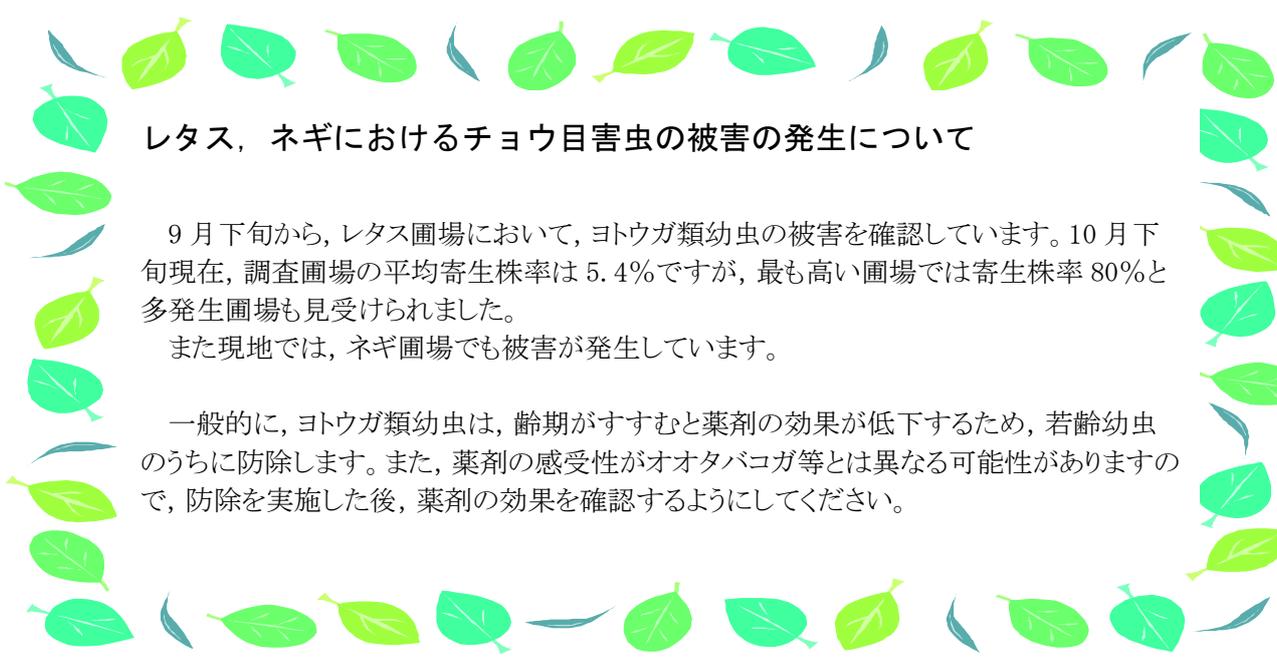
[予報の根拠]

- ① 10月下旬現在、被害度\* (本年値 11.3, 平年値 4.9), 発生地点率 (本年値 100%, 平年値 69%)  
ともに平年よりやや高い。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。  
② 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。  
③ 県内でネギハモグリバエの別系統が確認されている(令和元年5月20日 病害虫発生予察  
特殊報第1号参照)。本系統の薬剤感受性は従来系統と異なる可能性があるため、防除実施後  
は効果を確認する。



## レタス、ネギにおけるチョウ目害虫の被害の発生について

9月下旬から、レタス圃場において、ヨトウガ類幼虫の被害を確認しています。10月下旬現在、調査圃場の平均寄生株率は5.4%ですが、最も高い圃場では寄生株率80%と多発生圃場も見受けられました。

また現地では、ネギ圃場でも被害が発生しています。

一般的に、ヨトウガ類幼虫は、齢期がすすむと薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫のうちに防除します。また、薬剤の感受性がオオタバコガ等とは異なる可能性がありますので、防除を実施した後、薬剤の効果を確認するようにしてください。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並 ～やや少ない	10月下旬現在，平年並～やや少ない発生である。
	アブラムシ類	発生量：やや多い	10月下旬現在，やや多い発生である。
	ハダニ類	発生量：平年並 ～やや少ない	10月下旬現在，平年並～やや少ない発生である。
促成ピーマン	うどんこ病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	ハスモンヨトウ	発生量：やや多い	10月下旬現在，やや多い発生である。
	ハダニ類	発生量：平年並 ～やや多い	10月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	アザミウマ類	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
キュウリ 促成	退緑黄化病	発生量：－	10月上旬現在，抑制キュウリにおいて発生を確認している。媒介虫であるタバココナジラミの防除対策等を徹底する。
クサイハ 秋冬	黒斑細菌病	発生量：平年並 ～やや多い	10月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
タスレ 冬	菌核病	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
ネギ 秋冬	黒斑病（葉枯病を含む）	発生量：平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。

## ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況と防除対策

県内 83 地点の水田において、ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発生状況を調査したところ、全市町村で発生を確認しました。翌年の縞葉枯病の発生を少なくするため、速やかにひこばえをすき込むとともに、冬季の畦畔等の除草に努め、ウイルスを保毒したヒメトビウンカの越冬量を減らしましょう。

### [現在の発生状況]

- ① 令和元年 9～10 月に調査した結果、すべての市町村でイネ縞葉枯病の発生を確認した（図）。
- ② 県西地域の平均発病株率は 17.0%と県内で最も高かった（表）。
- ③ 市町村別の最高発病株率は、0.3～85.3%であった（図、表）。

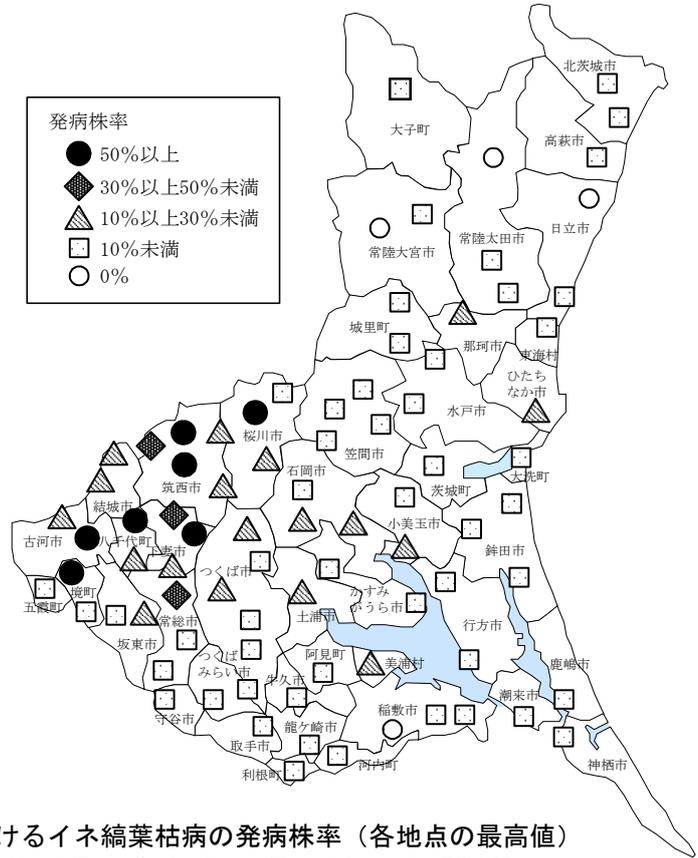
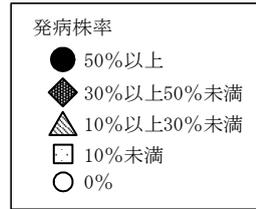


図 ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の発病株率（各地点の最高値）

注1) 調査した 5 圃場／地点のうち、最も高かった圃場のデータ 注2) 1 圃場あたり 300 株の見取り調査

表 ひこばえ（再生稲）におけるイネ縞葉枯病の各市町村別の平均発病株率および最高発病株率

地域	市町村	発病株率 (%)		地域	市町村	発病株率 (%)		地域	市町村	発病株率 (%)	
		平均 <sup>1)</sup>	最高 <sup>2)</sup>			平均	最高			平均	最高
県北	日立市	2.0	8.7	鹿行	鹿嶋市	0.1	0.3	県南	守谷市	6.0	8.7
	常陸太田市	0.8	4.7		神栖市	0.1	0.3		つくばみらい市	0.9	2.7
	高萩市	0.3	1.0		鉾田市	0.4	1.0		利根町	0.3	0.3
	北茨城市	0.4	1.7		潮来市	0.3	0.7		県南平均	2.5	-
	常陸大宮市	0.1	0.3		行方市	0.4	1.0		下妻市	23.8	58.3
	大子町	0.5	0.7		鹿行平均	0.3	-		筑西市	21.6	85.3
	県北平均	0.7	-						桜川市	9.7	51.0
県央	水戸市	3.4	6.0	県南	土浦市	3.8	10.0	結城市	14.5	29.3	
	ひたちなか市	7.3	15.3		石岡市	5.5	20.3	常総市	14.0	37.7	
	那珂市	3.3	10.7		かすみがうら市	2.3	4.7	八千代町	22.8	67.3	
	小美玉市	5.9	15.7		龍ヶ崎市	0.2	1.0	古河市	24.1	54.0	
	茨城町	5.5	9.3		牛久市	0.5	1.0	坂東市	7.0	14.0	
	大洗町	6.9	8.3		稲敷市	0.5	2.3	五霞町	4.0	6.7	
	東海村	3.1	3.7		美浦村	4.1	10.3	境町	16.7	51.0	
	笠間市	3.2	7.3		阿見町	4.1	6.7	県西平均	17.0	-	
	城里町	1.2	3.0		河内町	0.3	0.7	全県平均	6.7	-	
	県央平均	4.0	-		取手市	0.1	0.3				
			つくば市	2.8	12.3						

1) 各市町村1～6地点の平均値。1地点あたり5圃場調査（300株/圃場）  
 2) 市町村内で最も高かった圃場のデータ

## ナシ黒星病秋型病斑の発生状況と秋季防除

黒星病はナシの重要病害であり、近年発生が多い傾向にあります。翌年の伝染源を減らすため、秋季防除・落葉処理を徹底しましょう。

### 1. 本年の発生状況

10月中旬に行ったナシ黒星病の秋型病斑(写真)の発病度および発生地点率は平年より低くなった(表1)。



写真 ナシ黒星病の秋型病斑（葉裏の薄い黒色の病斑）

表1 ナシ黒星病（秋型病斑）の発病度と発生地点率

地域(地点数)	発病度 <sup>1)</sup>		発生地点率(%)	
	R1	平年 <sup>2)</sup>	R1	平年 <sup>2)</sup>
県北・県央(4)	0.3	1.4	25	65
県南(6)	0.2	1.2	33	66
県西(10)	0.1	0.8	20	69
全県(20)	0.2	1.1	25	69

- 1) 発病度：圃場当たり 300 葉について発病の程度をもとに算出した値。  
最小値は 0 で最大値は 100 となる。  
2) 平年：平成 21～30 年の平均値

### 2. 防除対策

#### ①落葉前の薬剤防除

黒星病の秋型病斑上に形成された分生子は、10～11月の降雨により、枝を流れ落ちて鱗片に感染し、翌年の伝染源となる。そのため、収穫終了後から落葉前までに2回程度の薬剤防除を行う。特に、徒長枝の先端に薬液が十分かかるよう、スピードスプレーヤーの散布圧を調整する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

また、ナシの場合、農薬の使用回数は本年の収穫終了後から翌年の収穫終了までをカウントするため、注意する。

#### ②落葉処理

秋型病斑を生じた落葉上に形成された子のう胞子は、翌年の3～5月にかけて好適な温度・湿度条件になると降雨の度に飛散する。そのため、落葉は集めて土中深く埋める等、落葉処理を徹底し、翌年の伝染源を減らす。(この作業ができない場合、ロータリ耕ですき込むだけでも効果が期待できる。)

## 本年のブドウ主要病害の発生経過と今後の防除対策

本年のブドウにおける主な病害の発生状況をまとめました。休眠期は薬剤による防除のほか、落葉処理や巻きひげの除去等、病害虫の発生しにくい圃場の整備に努めましょう。

### 1. 晩腐病

例年8月頃から発生が見られ、収穫期にかけて増加する。本年は8月下旬より発生し、発病果房率は平年よりやや高かった(表)。

**症状** 果実表面に鮭肉色の孢子粘塊を生じ(写真)、果皮にしわがよってミイラ化する。

**感染経路** 病原菌は結果母枝等に潜在的に感染しており、5~7月頃に降雨により果実に伝搬され、その後の酸度低下・糖度の高まりとともに発病する。

**防除対策** ◇病原菌の越冬場所となる結果母枝、巻きひげ、果梗の切り残し等を剪定時に取り除き、適切に処分する。

◇本年多発した圃場では、次年度も多発する可能性があるため、発芽前の休眠期防除および開花直前から大豆粒大期までの予防散布に重点を置く。

◇傘かけや袋かけを行う。例年発生が問題となる圃場では雨よけ施設の導入を検討する。

### 2. ベと病

例年、6月頃から発生するが、本年は8月下旬から発生を確認し、9月下旬に急増した(表)。

**症状** 若葉では緑色が薄れた病斑、成葉では葉脈に囲まれた角型の黄色病斑を形成し、葉裏には毛足の長い白いかびが密生する。果穂に発病すると果実の肥大が停止する。

**感染経路** 病原菌は被害葉の組織内で越冬し、5月の展葉期ごろから雨水や風で葉に到達する。発病後は葉裏の白いかびから2次伝染を繰り返す。

**防除対策** 落葉は翌年の伝染源となるため、集めて土中深く埋める等、適切に処分する。

### 3. 褐斑病

例年、7月頃より発生を確認するが、本年は8月に発生を確認し、発病葉率は平年よりやや低かった(表)。

**症状** 葉に黒褐色の病斑を生じ、表裏に黒ずんだかびが見られる。発病が激しいと早期に黄化落葉し、果房の着色不良や糖度低下を招く。

**感染経路** 病原菌は、結果母枝や枝の粗皮、落葉に付着して越冬する。これらが開花期ごろから風雨によって飛散し、伝染源となる。

**防除対策** 翌年の伝染源となるため、落葉は集めて土中深く埋めるとともに、結果母枝等は剪定時に取り除き、適切に処分する。



写真 晩腐病による被害果実

表 晩腐病、ベと病および褐斑病の発生推移 (%)

病害名	調査項目		6月	7月	8月	9月
晩腐病	発病果房率	本年	0	0	6.4	-
		平年	0	0.1	3.9	-
べと病	発病葉率	本年	0	0	1.4	8.4
		平年	0.3	2.5	3.8	6.5
褐斑病	発病葉率	本年	0	0	0.1	0
		平年	0	1.3	2.8	14.7

- : 収穫済みのため欠測

## 関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 11月2日から12月1日)

気象庁 (10月31日 発表)

<向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	30	30	40
	降水量	関東甲信全域	40	30	30
	日照時間	関東甲信全域	30	30	40

### [概要]

期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<1 週目の予報> 11月2日(土曜日) から 11月8日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに 40%

<2 週目の予報> 11月9日(土曜日) から 11月15日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 50%

<3 週目から 4 週目の予報> 11月16日(土曜日) から 11月29日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 40%

### 農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類\* (FRAC コード, IRAC コード) の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報 5月号(平成 31年 4月 25日発表)の防除所  
レポート参照

- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。